

ウリノキの雄薬数と花弁数

著者	梅林 正芳, 植田 邦彦
著者別表示	Umebayashi Masayoshi, Ueda Kunihiro
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	44
号	1-2
ページ	91-93
発行年	1996-12-30
URL	http://doi.org/10.24517/00055588



versity, Kanazawa 920-11, Japan)

○ 梅林正芳・植田邦彦：ウリノキの雄蕊数と花弁数 Masayoshi Umebayashi and Kunihiko Ueda: Petal Numbers and Stamen Numbers in *Alangium platanifolium* var. *trilobum* (Alangiaceae)

ウリノキ科 Alangiaceae はウリノキ属 20 種ほどと新世界に 1 属 (3 種) が知られている木本性の小さな科で、日本には 2 種が自生している。ウリノキは北海道から九州までの山地に普通に見られ、朝鮮、中国にも分布しており、変種モミジウリノキは本州西部から朝鮮にかけて知られる。九州南端から琉球列島にかけてはシマウリノキが分布している。ウリノキの花序は集散花序で多くは 3 花をつけ、時に 2, 4, 5 花のものが見られ、頂端の花よりほぼ順に開花していく。ところがそれらの花を見てみると、どうも図鑑の記載とは合わないことに気がついた。我々が調べた限りの植物誌、図鑑でウリノキの花弁数・雄蕊数に言及しているものすべてにおいて、ウリノキは「花弁 6 個、雄蕊は 12 個」となっており、シマウリノキは「花弁 7 個」(大橋 (1989) では後者の雄蕊数について唯一言及があり、7 個とされている) と記載され、その上さらに、花弁数は両種の検索にも使われている (牧野 1940, 1961; 奥山 1957, 1977; 北村・村田 1971; 大井 1978; 林 1985; 大橋 1989; 小野他 1989; 雄蕊数に言及のないものは引用せず)。

しかし、我々が収集したウリノキで検討した結果は、これらの記載とは大きく異なるものであった。すなわち、132 花序、401 花 (富山県上市町 16 花序、同利賀村 14 花序、同八尾町 23 花序、同大沢野町 14 花序; 金沢市犀川ダム近辺 8 花序、同内川ダム近辺 57 花序) を調べてみたが、その結果、表 1 に示すような事実が判明した。すなわち、244/401 が花弁数 7、雄蕊数 7 で、次に 89 花が花弁数 8 で雄蕊数が 8、花弁数 6 雄蕊数 6 が 43 花、その他はごく少数であることがわかった。このことから、1) 花弁数と雄蕊数は同数であり、稀に異なる場合でも雄蕊数が花弁数の 2 倍あるものはない; 2) 花弁数は 7 が半分以上を占め、ついで 8 枚、6 枚の順となる; 3) 花序内の花の位置とこれらの数についてはまったく相関がないこと、がはっきりと指摘できる。調べた地域が偏っているおそれがないとは言えないので最終的なことは言えないが、少なくとも金沢から富山にかけての地域のウリノキは従来の記載とは明らかに異なる花をもつことは確かである。

したがって、シマウリノキとウリノキとの区別において花弁数は種差を表すキー形質として使えないし、ウリノキの雄蕊数は花弁数と同数で、多くの場合は 7 で時に 8 または 6 ということになる。

Table 1. Numbers of petals and stamens in 401 flowers (132 inflorescences) of *Alangium platanifolium* (Siebold et Zucc.) Harms var. *trilobum* (Miq.) Ohwi

Flowering Order Petal nos. / Sta- men nos.	1	2	3	4	5	計
P 5 S 8	—	1	—	—	—	1
P 6 S 5	—	—	1	—	—	1
P 6 S 6	15	12	11	3	2	43
P 6 S 7	2	—	1	—	—	3
P 7 S 6	1	5	1	—	—	7
P 7 S 7	76	78	74	13	3	244
P 8 S 6	1	1	—	—	—	2
P 8 S 7	3	2	4	—	—	9
P 8 S 8	30	33	22	4	—	89
P 9 S 8	1	—	1	—	—	2
	129	132	115	20	5	401

旧世界のウリノキの類は現在では *Alangium* に分類するのが一般的であるが、かつては花弁数と同数の雄蕊をもつ *Marlea* と、2 倍数の雄蕊をもつ *Alangium* とを認めることもあった。今回調べた著作では大橋 (1989) を除き、ウリノキ科には新大陸のものを含まずにウリノキ属のみを認め、「雄蕊は花弁と同数または 2 (-4) 倍数」と記されている。この意味で、唯一の例外が中井 (1928) の記載で、花弁数 8、雄蕊数 8 となっており、

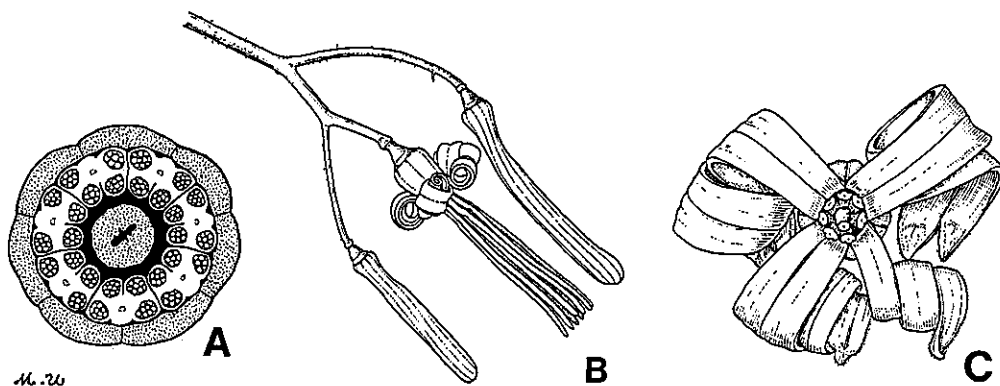


Fig. 1. *Alangium platanifolium* var. *trilobum*. A, cross section of a flower. B, inflorescence. C, flower.

花弁と雄蕊とが同数であることから中井はウリノキを *Marlea* に分類している。ちなみに、シーボルトとツッカーニーによる 1843 年のウリノキの原記載時には *Marlea* で記載されているが、花弁数にも雄蕊数にも言及はない。

ウリノキでは花弁がつぼみの時に互いに癒着しており、それが割れて開花するのであるが、図のように必ずしもすべてきれいに離れるわけではない。このことから花弁数が若干少な目に数えられることがあったとしても、雄蕊数は数え間違えるような構造ではないし、大きさも肉眼観察にあまりある大きさである。何故に従来の記載がこのように一致して間違っただけであるのか、たとえ孫引きを重ねたとしても不可解である。北村・村田 (1971) では、はっきりと 6 枚の花弁と 6 個の雄蕊が示されている花式図が描かれているにも関わらず、記載では雄蕊が 12 個となっているし、奥山 (1977) でも図を見る限り雄蕊は 6 本描かれているが記載は 12 である。残念ながら、堅固なこの誤記載の「起源」はわからず、謎のままである。牧野 (1924) には花弁数、雄蕊数の記載はなかった。

前回指摘したモクレン科や今回のヒトツバタゴ、ウリノキなど、同定が容易な木本性の種の記載はあらためて見直してみる必要が多いように思われる。

最後に、富山県上市町のもは木下栄一郎氏により採集されたものであり、ここに感謝の意を表します。

引用文献

- 林弥栄 (編著). 1985. ウリノキ. 「山溪カラー名鑑日本の樹木」, p. 514. 山と溪谷社, 東京.
- 北村四郎・村田源. 1971. うりのき科. 「原色日本植物図鑑木本編 I」, pp. 199-201. 保育社, 大阪.
- 牧野富太郎. 1924. うりのき. 「牧野日本植物図鑑」, p. 939. 北隆館, 東京.
- 牧野富太郎. 1940. うりのき. 「牧野日本植物図鑑」, p. 297. 北隆館, 東京.
- 牧野富太郎. 1961. うりのき. 「牧野新日本植物図鑑」(前川文夫他補遺), p. 421. 北隆館, 東京.
- 中井猛之進. 1928. 瓜木科. 「朝鮮森林植物編第 17 輯」, pp. 20-29. 朝鮮総督府林業試験場.
- 大井次三郎. 1978. ウリノキ科. 「改訂増補新版日本植物誌顕花篇」, pp. 942-943. 至文堂, 東京.
- 奥山春季. 1957. うりのき. 「原色日本野外植物図譜 1」, p. 91. 誠文堂新光社, 東京.
- 奥山春季. 1977. ウリノキ科. 「平凡社版寺崎日本植物図譜」(寺崎留吉図・奥山春季編), pp. 532-533. 平凡社, 東京.
- 小野幹雄・大場秀章・西田誠 (編). 1989. ウリノキ, シマウリノキ. 「改訂増補牧野新日本植物図鑑」, p. 493. 北隆館, 東京.
- 大橋広好. 1989. 「日本の野生植物木本 II」(佐竹義輔・原寛・巨理俊次・富成忠夫編著), p. 108. 平凡社, 東京.
- (〒920-11 金沢市角間町大学理学部生物 Department of Biology, Faculty of Science, Kanazawa University, Kanazawa 920-11, Japan)

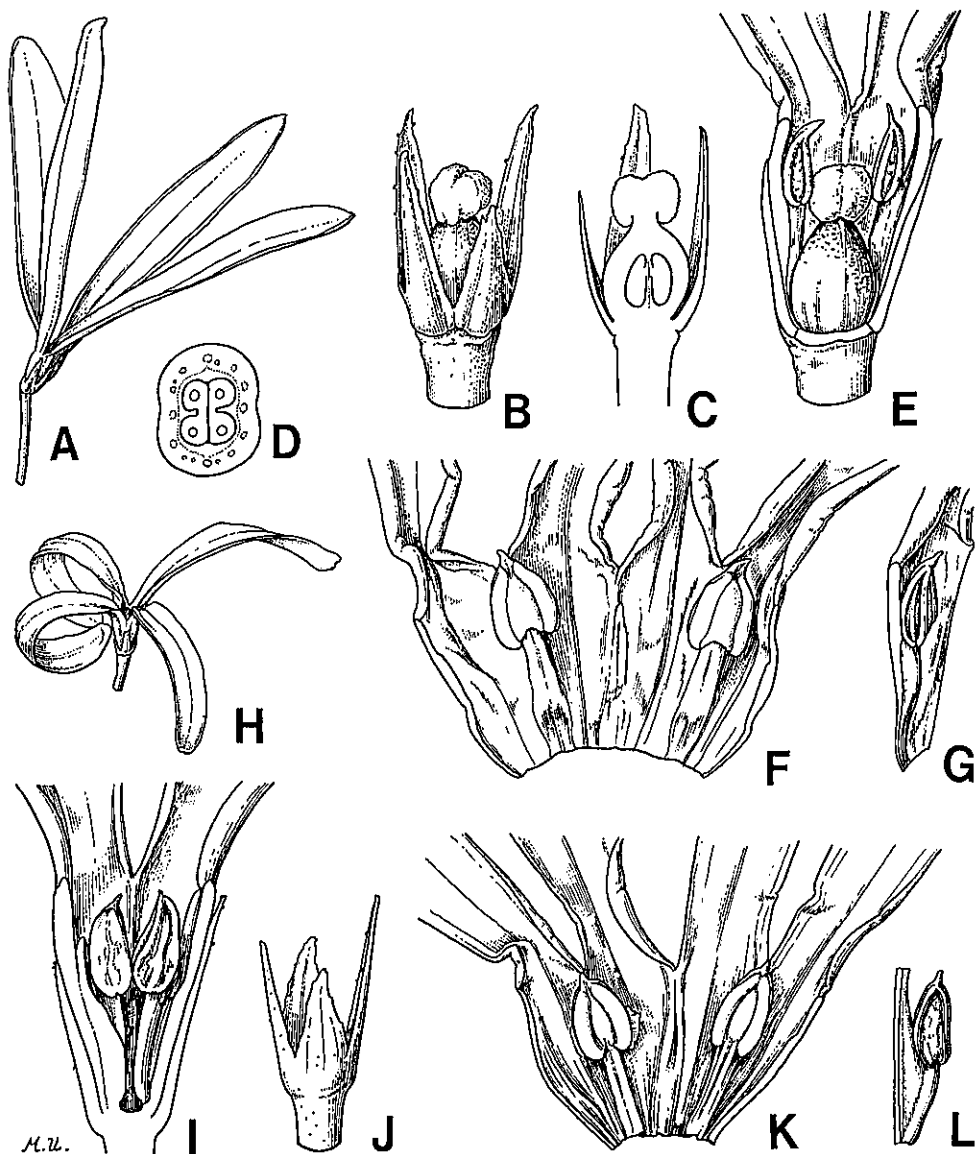


Fig. 1. Flowers of *Chionanthus retusus* from Tsushima Isl. A-G, bisexual flower. H-L, male flower. A, H; flower. B, J; flower removing corolla. C, longitudinal section of pistil. D, cross section of ovary. E, I; longitudinal section of basal part of flower. F, K; inner view of basal part of corolla. G, L; side view of stamen. A, H: $\times 2$. D: $\times 20$. the others: $\times 10$.

○ 植田邦彦：ヒトツバタゴは雄性両性異株である Kunihiro Ueda: Androdioecism in *Chionanthus retusus* (Oleaceae)

ヒトツバタゴは現在普通に使われているすべての植物誌や図鑑で、最新の Yamazaki (1993) も含め、例外なく雌雄異株となっている。しかし、これは太田 (1983 等) がかねてより指摘し続けてきているように、本種は雄花だけをもつ株と両性花をつける株とがある雄性両性異株である (Fig. 1)。

実は白井 (1894) が紹介しているように、古く飯沼慾齋が本草図説で尾張に自生することと、雄花と両性花があることを指摘している。しかし、牧野は白井 (1908) が繰り返し紹介したにもかかわらず、飯沼慾齋が尾張に産することを述べているシデコブシの場合と同様に、日本での自生すらも疑っており、ようやく田代善太郎が対馬で発見したことで日本自生種であることを認められた (牧野 1910)。牧野図鑑でもその